

近世箱館の都市社会

お茶の水女子大学大学院

馬場貴和子

箱館は蝦夷地（現北海道）の最南端の都市として津軽海峡をへだてて本州（青森県）と向かい合っている。波が穏やかで船を繋ぐ必要もないため、「綱知らずの港」といわれ、古くから港として利用されていたが、アイヌの反乱により 200 年以上和人の居住はなく、都市として発展し始めるのは江戸中期ごろからである。

江戸期の箱館は、松前三港として松前・箱館・江差が設定されたことにより、蝦夷地における限られた交易可能な港の一つとなったが、松前・江差に比べて交易は少なく、この頃人口も三港の中で最も少なかった。しかし、北前船の発展や、蝦夷地の幕府直轄時の中心港になったこと、貿易港として開港されたことなどにより、蝦夷地随一の港都市として発展していく。

そのような発展を遂げた箱館であるが、大火や戦争による残存史料の少なさにより、町や中小町人の動向についてはわかっていない部分が多く、町や町人を対象とした先行研究も少ない。

そこで本発表では箱館の町やそこに暮らしていた町人について、限られた史料の中ではあるが、主に幕末の史料を用いてその都市社会の一端をみていきたい。具体的には、箱館の町の要である問屋と沖ノ口、そして他国より蝦夷地へやって来た者を指す旅人と職人の史料から市内中小町人の動向を探りたい。

沖ノ口ではあらゆる物と人を改めるが、問屋は物を改め、人を改めるのは旅人宿であった。旅人は開港に伴う台場普請などに伴い安政 4 年（1857）に従来まで課せられていた役銭が撤廃され、その移入数は増加し、これまでどおりに社会生活を送ろうとする市在の箱館町人と既存の社会生活にとらわれない旅人との対立が見られた。これは箱館奉行所の積極的な旅人及び町人移入政策によって、これまでの市内の慣習では通用しない社会が形成されつつあったと考えられる。

今後はさらに市内町人の動向について調べるとともに、未だ不透明な部分が多い問屋や旅人宿などの都市社会における人・物の流通に関わる部分も明らかにしていきたい。